

# 常國寺だより

2020年 秋号

## あたらしい生活

常國寺住職 浅尾康行

九月に入り日差しがやわらくなり、朝晩には秋の気配が感じられるようになりました。今年のお盆は外出自粛のため、帰省をお控えになった方も多いことと存じます。

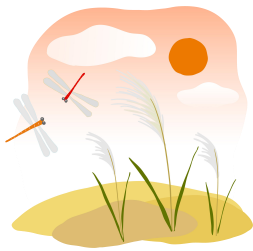
新型コロナウイルスの感染防止のため、人との接触を減らして過ごす、新しい生活が提案されています。ネットでの買い物や、オンラインでの会議、飲み会など、一年前には考えもしなかった窮屈な体験を強いられています。それでもわれわれ

人類は、外出せずに仕事や買い物をする仕組みや、人との関わり合いを補助するいろいろの手段を考え出しています。

新型コロナウイルスの大流行も、「諸行無常」の言葉どおり、永久に続くものではありません。ワクワクも実用化の一步手前まで開発されているそうですから、今後はコロナウイルスを怖がっているだけではなく、インフルエンザと同じように、「治る病気」として、共存していくライフスタイルを選

ぶことになるでしょう。家に居る時間が長いので、いつも以上に、手紙やはがきをお書きになった方も多いのではないのでしょうか。

一文字一文字、思いを込めて手書きをすることで、心が休まり、お相手との絆も強くなるとすれば、それもコロナウイルスを克服する一つの形かもしれません。 合掌



# 阿弥陀經の世界

衆徒 浅尾妙綾

## 阿弥陀經とは

皆様は、ご法要のとき、阿弥陀經をお聞きになるのではないのでしょうか。「仏説阿弥陀經」と読み上げた後は、音木（おんぎ）の拍子もつくと、とてもリズムミカルな印象です。

漢文で読み上げていきますので、そのままでは意味がわかりにくいかもしれません。今回は阿弥陀經に説かれている世界の一部をご紹介します。

阿弥陀經は、浄土真宗が聖典とする浄土三部經のうちの一つで、極樂浄土を称えたものです。

インドの經典を中国の僧侶・鳩摩羅汁（くまらじゅう）（三四四―四一三）が漢訳したものが、ご法要で読

み上げられます。鳩摩羅汁は、インドで大乗仏教を学び、般若經、法華經など多数の漢訳を行ないました。

## 阿弥陀經の世界

阿弥陀經は、祇園精舎で大勢の弟子を前に、お釈迦様が極樂についてお説きになる場面から始まります。

經典には、「又舍利弗（うしやりほつ）」という文言が何度も出てきますが、これは「舍利弗よ」と弟子に呼びかけている場面です。

一般には、弟子の問いかけにお釈迦様がお答えになるという形式をとる經典が多いのですが、阿弥陀經はお釈迦様自身が阿弥陀仏の極樂について説かれる形式となっています。

その内容の一部を次にご紹介いたします。

「極樂には、生老病死をはじめとする苦しみがなく、煩惱を離れた樂しみだけがあるため、極樂と名付けられている。

極樂国土は七重の欄干、並木などがありそれらは金・銀・青玉・水晶の四宝で飾られている。

極樂国土には七つの宝でできた池があり八つの功德を備えた水がたたえられおり池の底には一面の金の砂が敷き詰められている。池のほとりには樓閣がそびえ、金・銀・青玉・水晶・白珊瑚・赤真珠・瑪瑙（めのう）で飾られている。

池に咲く蓮の花は、車輪ほどの大輪で、青色の花には青い光、黄色の花には黄の光、赤色の花には赤い光、白色の花には白い光が照っている。

また、仏国土にはいつも自然の音楽が流れ、大地は黄金に輝き、昼と夜に三度、曼陀羅華(まんだらげ)が花の雨を降らせる。

仏国土には、白鶻(びやくこ)・孔雀(こく)やく・鸚鵡(おうむ)・舍利(しやり)・迦陵頻伽(かりよびんが)・共命鳥(ぐみよちりょう)といった鳥が、阿弥陀仏の法の音(のりこえ)を弘めるために、さえずっている。かすかな風が宝の並木や宝の網をそよかせて妙なる音を奏で、その音を聞くものは、仏法・僧を念ずる心がおこる。」

(和訳は堤玄立著『浄土三部経』法蔵館参照)。

このように極楽を説いた後に、阿弥陀仏の功德、名号の重要性を説き、東方、南方、西方、北方、下方、上方の諸仏が阿弥陀仏の徳を称えており、この浄土への往生を願えば生まれることができますと説いています。

## 極楽の世界

今回は極楽をクローズアップしました。このような文言を読むと、極楽とは、黄金と宝石に輝いた極彩色の世界のように想像してしまいます。

インドで説かれていた仏教を漢訳しているのが、阿弥陀経の極楽にはインドの美意識が残存しています。煩惱を持ったままでも、極楽の黄金、宝石、色とりどりの花や鳥の世界に心を奪われてしまいそうです。

極楽は、インドから中国、韓国を経て日本に流伝されましたが、たとえば、宇治の平等院鳳凰堂のように日本の極楽は、ずいぶん趣が異なります。



煩惱を離れた楽しみのある世界だとしても、それが説かれた国や時代が異なれば、その情景もおのずから異なるようです。

しかし、さらに深く考えれば、極楽は、人それぞれの心の中にあると考えられます。極楽にあるものは、私たちの煩惱を満たすものではなく、私たちが解き放たれた私たちを楽しませるところではないでしょうか。

極楽とは、苦しみから解放され、心の安らぎが得られる場所と考えるはいかがでしょうか。

私たちは、日々の生活に追われがちですが、そんな中にも、安らぎのひとつを見出したいもの。目では見えない「あした」に、心の目で夢や希望を見出すことができれば、黄金の極彩色の世界に憧れるのではなく、いま生きている日々を輝かせることができるのではないのでしょうか。

ます。極楽とは

## 春夏秋冬お料理帳

管理栄養士 浅尾昌美

### 秋と言えば・・・



「香り松茸、味しめじ」と、昔から言われます。松茸は、ご飯や天ぷら、土瓶蒸しや、焼きものなどにして、その豊かな香りと食感が楽しまれています。

柑橘類の「柚子」や「すだち」もまた、数滴でも、「いい香りね」と声が出るほどの芳香を漂わせます。

香りはその季節を感じさせてくれますが、食材そのものをひきたてる陰の立て役者のような役目もしています。

たとえば、柚子の汁をかけたほうれん草のお浸しは、それだけを食べ

るより、香りよいお浸しになります。◎「春菊とえのき茸の胡麻和え」。

◎春菊とえのき茸の胡麻和え

材料四人分

春菊 150g

塩 少々

えのきたけ 150g

炒り胡麻 大さじ1

薄口しょうゆ 大さじ1/2

みりん 大さじ1/2

すだちの絞り汁 大さじ1

- ① 春菊は塩をひとつまみ入れた熱湯で2分くらいゆで、すぐ水にさらし、冷ましてからザルに取り、3cmに切り固くしぼる。
- ② えのきたけは石づきをとり、4cmに切り、熱湯で1、2分ゆでてザルに取り、冷ます。
- ③ 炒り胡麻はすり鉢に入れ、よく

すり、薄口しょうゆとみりんを加え、さらにすり、味をなじませる。

④ 春菊としぼったえのきたけを③に入れ和える。

⑤ 器に④を盛りつけて、上から小さじですだちの絞り汁をかける。

★ 赤坂寺庵(てらん) 精進料理教室のホームページ <http://akasaka-teran.net/>

★ 常國寺ホームページのご案内 <https://akasaka-jokokuji.net>

寺小屋の行事のご案内

常國寺落語会 十一月八日(日)

十三時三十分より十四時三十分

定員 十五名 参加費3,000円

コロナ感染拡大防止を考慮しつつ開催します。

常國寺だより

編集者 浅尾 妙綾

発行 真宗高田派常國寺